

Top Interview

トップインタビュー

— 変革に挑む —

まとめ／堀水潤一 撮影／都筑 淳

東京工芸大学 学長 吉野弘章



テクノロジーとアートの融合。 創立以来のぶれない軸が、 困難な時代を生きるキーワードに

本

学部のルーツであり、我が国の写真教育の先駆的存在である小西寫眞専門学校は1923年に創設されました。写真はカメラなどのテクノロジーの面と表現などのアートの面を併せもち、両者の要素を取り入れた教育は、現在の工学部と芸術学部という学部構成につながっています。「工芸融合」は、ぶれることなく貫かれてきた本学のフィロソフィーなのです。事実、工学部における「写真演習」「デザイン演習」など工芸融合科目を多数用意するほか、学部をまたいだ共同研究も盛んです。

この両輪があつてこそ社会の発展がある。そうした信念は、先の見通せない現代においてより求められるでしょう。例えばコロナ禍の外出自粛において、オンライン上で自分を表現し、他者と共有することで、心の安定や問題解決に向かうといった活動が盛んになりました。地球規模の困難を乗り越えるには最先端のテクノロジーの結集と同時に、人々の心をつなげるアートの必要なのです。

その点、本学の芸術学部で扱うアートは、絵画や彫刻などの伝統的な美術とは異なります。社会の中で広く役立ち、親しまれる、いわゆるメディア芸術です。ゲームやアニメーションという趣味や娯楽の世界と思われるがちですが、社会を救う可能性のある分野だと確信しています。

今のような時期に、本学しかもルーツである写真出身の私が学長に就任したのも、何かに後押しされたのだと思うようにしています。困難な状況ではあるものの、新しい教育の可能性も見えてきました。例えばオンライン授業は、歯がゆい部分もちろんありますが、だからこそきちんとした授業設計につながるし、録画を見返すなどして精度を高めることも可能です。教室では発言に消極的な学生が、チャットだと質問することもあるでしょう。新しいテクノロジーを通常の講義に活かすことで学習効果はもっと上がるはずですよ。

ある教員がこんなことを話していました。年度当初、オンラインでのガイダンス終了後、学生が退出しようとしているので、どうしたのか尋ねると、「先生は今何をしているんですか」「どんな本を読んだらいいですか」など、次々と質問があがったそう。大学は、人と人とのつながり、切磋琢磨する場です。今後、こうした関係性をどう深め、つながりを築いていくか知恵を絞っているところですよ。

【学長プロフィール】よしの・ひろあき●1965年生まれ。東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアアート専攻博士前期課程修了。80年代後半より写真専門キャリアにて写真展のプロデュースや作家のマネジメントを行う。2004年4月京都造形芸術大学芸術学部情報デザイン学科専任講師。07年同准教授。09年4月東京工芸大学芸術学部写真学科准教授。11年同教授。写真学科主任、芸術学部長を経て、20年4月より現職。

【大学プロフィール】1923年小西寫眞専門学校として創立。工学部工学科(機械コース、電気電子コース、情報コース、化学・材料コース、建築コース)、芸術学部(写真学科、映像学科、デザイン学科、インタラクティブメディア学科、アニメーション学科、ゲーム学科、マンガ学科)および大学院工学研究科、芸術学研究科。工学部は厚木キャンパス、昨年度より、芸術学部の就学地を中野キャンパスに一元化。